

針對台灣大專生進行俳句創作指導之教學實踐 —以中國文化大學日文系的文學講義為例—

沈 美雪

中國文化大學日文系副教授

摘要

論者自 99 學年度 (2010) 起在任教的大學講授「人文素養」科目之一的文學相關課程，本課程以設定聽、說、讀、寫、譯等五種言語活動為指導的目標，具體的達成指標則為以下四點：①透過精讀理解文章，加強讀解力並能正確掌握內容及主旨。②理解言語文化的特質及表現上的特色，更加豐富語彙。③在接受發問的過程中培養思考力和想像力，進而能自我發問並思考作中人物的生活方式並提出想法。④鑑賞詩歌，並能從事創作。課程的內容主要是日本近現代的文學作品，特別是小說的精讀，設定的四點指導目標其中一點為「鑑賞詩歌，並能從事創作」，而內容具體而言，便是「俳句的創作與鑑賞」之指導實踐。

此論基於筆者本身擔任大學日文系文學課程教師的教學經驗，報告分配在俳句指導上 4 小時的課程內容，以及其教學實踐過程。

關鍵字：俳句、季語、印象、創作、鑑賞

受理日期：2017.03.10

通過日期：2017.05.05

**The Method to Instruct the Haiku Composition in the
University in Taiwan:
An Example from the Literature Course of the Japanese
Language and Literature Department, Chinese Culture
University**

Shen Mei-Hsueh

Associate Professor, Chinese Culture University, Taiwan

Abstract

The researcher has been instructing one course regarding Japanese Literature in Japanese Language and Literature Department, Chinese Culture University, since 2010. The course is considered as one of the humanity literacy subjects. The goal of the course is to strengthen listening, speaking, reading, writing and translating comprehensions. The contents of the course are set up with the goal to have the students appreciate poems and then write some articles themselves by reading the novels thoroughly, especially Japanese modern literary works. In particular, the course is to fulfill the objective of instructing the students to compose the haiku poems and appreciate them.

Therefore, the paper is completed by my experience of being the teacher of Japanese literature in the Japanese Language and Literature Department, Chinese Culture University, the contents of the four-hour program concerning the haiku poems, and the results of how it is practiced.

Keywords: haiku, season word, image, creation, appreciation

台湾の大学における俳句創作指導の取り入れ方 —中国文化大学日文系の文学講義を例として—

沈 美雪

中国文化大学日本語文学科 副教授

要旨

筆者は、民国 99 (2010) 学年度より、台湾の中国文化大学日文系において、「人文素養」科目の一つである、日本文学に関する授業を担当している。この授業は、話す・聞く・書く・読む・訳すという、いわゆる 5 種類の言語活動に即した学習指導を目指すもので、その指導目標として、①精読を通して文章を理解し、読解力を深めるとともに、内容や要旨を的確に捉える能力を身に付ける、②言語文化の特質および表現上の特色を理解し、語彙を豊かにする、③発問を受ける過程において思考力と想像力を養い、自ら進んで問いを発するとともに作中人物の生き方について考え、自分の意見を持つ、④詩歌を鑑賞し、自ら進んで創作できる—の 4 点を設定した。また、授業は、日本近現代の文学作品の、特に小説の精読を主体としたものであるが、もう一つの指導目標として「詩歌を鑑賞し、自ら進んで創作できること」という点があり、その内容を端的に言えば、「俳句の創作と鑑賞」という、つまり、俳句指導の実践である。

本稿は、こうした、筆者自身が大学の日本語文学科で日本文学を担当する教師として、俳句の指導に振り当てた 4 時間程度の課程プログラムの内容と、それをどのように実践したのかを報告するものである。

キーワード：俳句、季語、イメージ、創作、鑑賞

台湾の大学における俳句創作指導の取り入れ方 —中国文化大学日文系の文学講義を例として—

沈 美雪

中国文化大学日本語文学科 副教授

1. はじめに

筆者は、民国 99 (2010) 学年度より、台湾の中国文化大学日文系における「人文素養」(一般教養)科目の一つである、日本文学に関する講義¹を担当している。この講義のカリキュラム上の位置付けは、日文系 4 年次生が履修する、前後期各 2 単位 (年間合計 4 単位) の半期選択科目である。また、授業の内容としては、日本近現代の文学作品のうちの、特に、小説の精読を主体としたものである。そして、設定した 4 点の指導目標²の一つに「詩歌を鑑賞し、自ら進んで創作できること」という項目がある。これは、一言で言えば、「俳句の創作と鑑賞」といった、いわば、俳句指導の実践である。

そして、指導での具体的な狙いとしては、季語・切れ字・定型などといった俳句の表現法に対する理解、作品に対する鑑賞力などを高めることを主体とした上で、さらには、各自の言語感覚や感性に基づく俳句を創作するといったものである。ただ、実際の指導にお

¹ 本学科における 4 年次生を対象とした文学の授業は、民国 100 学年度までは「日本近代文学」という科目名であったが、同 101 学年度に「日本当代文学賞析」へ変更され、その後、同 102 年度に「日本名著選読」へと変更された。さらに同 103 学年度からは、前期を「日本当代文学賞析」、後期を「日本名著選読」とした、単年度選択科目から前後期各 2 単位の半期選択科目に変更され現在に至っており、俳句の講義は主に後期に行われている。

² 本授業は、話す・聞く・書く・読む・訳すといった 5 種類の言語活動に即した学習指導を目指すもので、その指導目標として、①精読を通して文章を理解し、読解力を深めるとともに、内容や要旨を的確に捉える能力を身につけること、②言語文化の特質及び表現上の特色を理解し、語彙を豊かにすること、③発問を受ける過程において思考力と想像力を養い、自ら進んで問いを発するとともに作中人物の生き方について考え、自分の意見を持つこと、④詩歌を鑑賞し、自ら進んで創作できること—の 4 点を設定している。(沈美雪 (2012)「作品の精読に働く思考力の向上を目指す「日本近代文学」の授業—中国文化大学日文系で教える日本文学の授業実践報告—」東吳大学日本語文学系「創系四十周年記念 2012 年日語教學國際會議」 pp. 383-397)

いては、いくつかの問題に直面した。具体的には、時間的な制約、受講生の俳句に対する予備知識の欠如と語彙の問題、授業プログラム上の制約など、といったものである。

こうした点を踏まえ、本稿は、大学の日本語文学科で日本文学を担当する教師として、俳句の指導に振り当てた4時間の課程プログラムの内容と、筆者自身がそれをどのように実践したのかを報告するものである。

2. 履修者分析と単元時間の設定

筆者の勤務校における日本文学関係の講義は、3年生と4年生を対象に開講されている。そのうち、筆者が担当するのは、4年生を対象としたものである。また、科目自体は選択であるため、履修者の多くは、本教科に興味を持ち、自らの意思で選択したと推測されよう。そして、筆者は、民国99(2010)学年度より当該教科を担当し現在に至っており、その間の履修者数は、毎年50人前後である。なお、履修条件は特に設けていないものの、授業進行の関係上、日本語文学科4年生以外の履修者には、日本語能力試験N2以上の日本語力を要求している。

また、本授業は、前述した通り、話す・聞く・書く・読む・訳すという5種類の言語活動に即した学習指導を目指すものである。そして、設定した4点の指導目標の一つに「詩歌を鑑賞し、自ら進んで創作できること」というものがある。これは、具体的に言えば、短歌や俳句などの韻文の鑑賞であり、さらに、俳句に関しては創作の指導も行っており、また、民国102(2013)学年度の前期の授業では、小倉百人一首の精読も取り入れた。そして、単元時間の設定は4時間で、韻文に関しては、前期では短歌、後期では俳句というカリキュラムの構成になっている。

3. 授業の展開 (1) 俳句の創作

4 年次生向けの日本文学の授業において、筆者が設定した学習目標の一つが「詩歌を鑑賞し、自ら進んで創作できること」である。そして、「俳句」に関する単元（以下、本単元とする）では「俳句の鑑賞と創作」をテーマとし、おおむね、「俳句についての講義」「俳句の実作」「俳句の鑑賞と句評」「俳句についての感想」の四つのパートからなる学習活動を行った。では、以下に、それぞれについて紹介する。

3.1 1 時間目「俳句って何？」—俳句についての講義

本単元の最初の授業では、まず、ウォーミングアップとして、俳句について知っていることを受講生に質問する。すると、最初に返ってくるのは、大抵、アニメ『ちびまる子ちゃん』に登場する「友蔵・心の俳句³」という場面についてである。そして、多くの受講生は、それ以外の認識や知識は、ほぼ皆無と言ってよかろう。また、友蔵おじいさんの詠むものは、俳句というより、実際には川柳に近いものであるが、予備知識を持たぬ台湾人の受講生は、もちろん、こうしたことを知る由もない。このほか、わずかではあるが、「五七五」といった 17 音の制限や「季語」というものを使うらしい、といった知識を有する受講生もある。ただ、それ以上はまったく知らないというケースがほとんどである。そのため、授業では、まず、俳句に対する初歩的な認識を与えるべく、1 時間目は、教師による講述を中心とした、いわゆるオーソドックスな講義形式を採っている。

また、授業においては、いくつかの句を例として挙げるが、著名な作品のほか、「日語俳句大賞⁴」に入選した本校学生の作品も含め

³ 人気アニメ『ちびまる子ちゃん』に登場するキャラクターで、主人公まる子の祖父である「友蔵」が、自身の心の内などを「五七五」調で詠む場面のこと。

⁴ 義守大学応用日語学系が主催する、台湾の大学生を対象とした日本語俳句のコンテストで、「日語俳句大会」「日本語俳句コンテスト」などとも称される。1 回目は 2010 年に行われて、その後、2016 年まで計 7 回まで開催された。執行委員長は義守大学の花城可裕氏、審査委員は台北俳句会の会員諸氏で、コンテストの作品や句評などを収録した『台湾俳句 ゆうかりぷたす』も、第 4 巻まで刊行されている。

た。これは、学生と同年代の作品を例句として紹介することで、俳句に対する親近感を受講生に持たせる目的もある。そして、こうした点に留意した講義に使うプリントは、年度によって多少の調整をするものの、おおむね、以下のようなものとなる。

【单元名】俳句を作ってみよう（〇〇年版）⁵

一、「俳句」について（詳細な内容は省略、以下同）

二、「俳句」の形式⁶

1. 定型：十七音（五七五）上五 中七 下五

古池や 蛙飛び込む 水の音 （松尾芭蕉）

5 7 5

柿喰えば 鐘鳴るなり 法隆寺 （正岡子規）

2. 季語（後述）

3. 「切れ」と「切れ字」

代表的な切れ字として「や」「かな」「けり」などがある。

【や】助詞：強調・詠嘆・疑問・願望

菜の花や 月は東に日は西に （与謝蕪村）

蚊の口や 私の肌にキスマーク （鄭*⁷郁）

向日葵や 日を追いかける首だるし （王*琪）

卒業や 泣き笑いの記念写真 （陳*好）

本を読むわが師の声や 目借時 （蔡*芸）

【かな】感動詞：感動、詠嘆を表す。

さまざまのことを思い出す桜かな （松尾芭蕉）

鳳凰花咲く頃に我は無職かな （董*亭）

春惜しむティッシュを畳む亭主かな （林*蓉）

⁵ 例として 2014 年度版の概略を示す。

⁶ ここでは、俳句には「有季定型」「無季俳句」「自由律俳句」などのさまざまな形式があることを簡単に触れた上で、授業では、主に「有季定型」の俳句について学習することを学生に説明する。

⁷ 「*」は、例句が本校（中国文化大学日文系）学生の作品であることを示すものである。

【けり】助動詞：完了時の詠嘆、回想の詠嘆。

※V2（ます形）＋けり ⇒ V たなあ

白煙をひいて流水帰りけり (石原八束)

桜道慕いし人と歩みけり (陳*好)

※「切れ字」を使う箇所

切れ字	上五	中七	下五
や	◎	◎	×
かな	×	○	◎
けり	○	○	◎

※「や・かな」、「や・けり」は一緒に使わない。(ただし、以下のような有名句もある)

降る雪や明治は遠くなりけり (中村草田男)

三、俳句の本質

山本健吉は、『純粹俳句』において、俳句を「俳句は滑稽なり。俳句は挨拶なり。俳句は即興なり」と定義する。その意味について考える。

※季語紹介

1. 「春」「夏」「秋」「冬」「新年」の季語を簡略に触れる。
2. 「全国日語俳句大賽」の題詠として出された季語について紹介。

実際の授業では、上掲のような内容を、1時間程度（おおむね50分以内）の時間配分で受講生に教え、理解してもらうことを目安としている。もちろん、内容としては、「俳句」についての非常に初歩的なものばかりである。ただ、その対象者は、まったくといっていいほど俳句を知らない外国人学習者である。そして、数年来の指導経験においては、あまり多く詰め込み過ぎると受講生の興味を削ぐこととなるケースが多く、情報を与え過ぎないことをいつも心掛け

ている。そのため、文法上の要点としては、まずは、季語・切れ字・定型などといった、俳句の表現法について理解を深めてもらうことを主体とした上で、その後、季語を意識しつつイメージーションを働かせ、心象風景を五七五のリズムでまとめるように指導した。また、例句として取り上げた作品は、有名な句もいくつかあるが、そのほかに、本校の卒業生、つまり学生の先輩たちの作品をなるべく取り入れるようにしている。これは、俳句初心者で日本語非母語話者の大学4年生などといった、いわば、同じ学習環境の同年代の学習者が、どのようなことに関心を持ち、それをどのように句として自分の感興を表出しているかを意識しながら学習できるようにといった意図によるものである。

3.2 2時間目「俳句を作ってみる」－俳句創作実践

本単元の2時間目は、「俳句創作」を目標としている。この時間で目指すところは、受講生が、個人の言語感覚や感性に基づいて俳句を創作することである。ただ、学生のコメントによると、その過程は、まさに「脳みそが蒸発しそうな苦心惨憺」だそうである。

授業の流れとしては、まず受講生に、「雑詠」と「題詠」とを、それぞれ1句作るように指示する。このうち、「雑詠」については、教師が提供したプリントの中に羅列してある季語の中から、受講生自身が好きなものを選んでそれを季語とし、「題詠」については、その年の「日語俳句大賞」において出された題詠の季語を使って、それぞれ句を詠むように指導した。

なお、受講生が創作をしている間、教師は、受講生からの質問を随時に受け付けるようにし、また、書き上げたばかりの作品に対しても適宜にアドバイスを行う。そして、創作の過程で受講生が直面している問題や、作られた句について、以下のような状況が見られた。

(1) 季重なり、あるいは無季

強風や傘が飛ばされ文化大（推敲前）

上掲の句は、季語が入っておらず、この点を指摘した。これを受け、学生が書き直したのが、次の句である。

台風や傘飛ばされし文化大（2011）

一般の方には、やや、イメージしにくいかもしれないが、中国文化大学で勉学生活を経験したことのある人なら、この一句が伝えようとするイメージが、容易に理解できるだろう。本校は、台北市の陽明山に位置しており、天候が悪い時などは、差している傘が吹き飛ばされることも少なからずある。これは、ある意味で、当地の、まさに「風物詩」とも言えるものである。そして、そのような情景を詠んだのが、この句で、「日語俳句大賞」への入選は果たせなかったが、実体験に基づいた、素直な一句と言えよう。

夏祭り焼きそばのタレ付けた浴衣（推敲前）

続く上掲の句は、「夏祭り」と「浴衣」の、二つの夏の季語が登場している。このため、「夏祭り」を削除し、また、できるだけ五七五のリズムに沿って句を詠むことと、切れ字を取り入れるようにとの指導をした。そして、受講生が推敲を重ねた末にできたのが次の句である。

焼きそばのタレをつけたる浴衣かな（2012「雑詠」入選句）

この句は、せっかく着飾ったきれいな浴衣に焼きそばのタレを付けてしまったという、なんとも言えぬ切なさや困惑さが、切れ字の「かな」によって表現されている。

以上に挙げた2例は、総じて、季語（季題）に対する認識不足によって生じた問題である。だが、教師による俳句の説明に割り当てられた時間がわずか1時間程度しかなく、さらに、創作の時間も1時間余りであるという、時間的な問題も原因であろう。そして、ほとんどの学生が、俳句についての予備知識として、「五七五」音であることぐらいしか持ち合わせていない状況では、「季重なり」や「無季」の句は避けるようにと注意しても、自分の句がそれに該当して

いることにさえ気付かなかったという学生さえもいる。そのため、この問題について、授業の2時間目は、学生の句を直接に見て直すような指導を行ったわけである。しかし、実際は、「季語」や「歳時記」については、普段から、時間をかけて馴染ませていかないと、実作の段階において、上述の例のような、季なし、もしくは季重なりといった句が散見される結果となるのである。

(2) イメージや意味の重複（言葉や表現の無駄遣い）

春惜しむ使い捨てティッシュ亭主かな（推敲前）

上掲の句においては、ティッシュは、もともとが使い捨てのものであり、 unnecessaryな説明が含まれている。そのため、「使い捨て」を削ぎ、その分、ほかの言葉を入れてイメージを豊かにするように指導した。その結果、受講生は次のように改作した。

春惜しむティッシュを畳む亭主かな（2013 題詠第一席）

俳句においては、意味の重複を避け、省略できることは省くことが大事である。そして、上掲の一作は、こうした指導を十分に理解し、推敲したものと言えよう。その成果もあり、この句は、第4回の「日語俳句大賽」において、李錦上氏の選で「題詠」第一席に入選し、同氏から「うららかな春が過ぎてゆく。家に籠って生真面目にティッシュを折り畳んでいる一家の主人、或いは屋台の主でしょうか。ご苦勞をなさっている姿がとてもありがたく思われる一句です⁸」との選評を頂いたのである。

(3) 体言の羅列

創作のポイントとして、因果関係の重複した説明などを取り除き、簡潔な言葉で豊かなイメージを表現することを説明した結果、すべての修飾表現が省かれた、以下のような句が作られたことがあった。

本の文字先生の声目借時（推敲前）

⁸ 李錦上選（2013）「第4回日語俳句大賽雑詠講評」『ゆうかりふたす』第4号、p.17。

この句は、「目借時」という季語の持つ本意にフィットした「本の文字」と「先生の声」とを添えている点は、特段の問題はないとも言えよう。ただ、この句は、五七五のすべてが体言止めになってしまっている点は、あまり、好ましいとは言えない。そのため、この点を学生に説明し、一つのまとまったイメージにしたらどうだろうかと提案した。その結果、学生が推敲を重ねた末に、「先生の声」を別の語句に置き換え、さらに、それにふさわしいイメージを抱かせるような、次の改作を提出してきた。

本を読むわが師の声や目借時（2013「題詠」第二席）

この句は、まるで念仏のような、教科書を棒読みする教師の声という点に絞り、春深く眠くてたまらない授業の風景を描く句となり、作品としては、相応に評価されるものであろう。

(4)感情を表す形容詞の多用

祭りの日下駄はく足がマジ痛い（2012）

猫の恋悲しいわれは一人かな（2014）

クリスマスリア充たちよ妬ましい（2014）

七夕や一年一度痛ましい（2014）

上掲の句は、いずれも、受講生の気持ちがよく分かる内容で、ほぼ笑ましいものではある。だが、俳句は日記ではないので、感情をストレートに吐き出されても、やや困るところである。しかし、学生にとっては、限られた時間内で、ありったけの文学的センスと日本語力を駆使した末に、やっとできた作品であるのは事実であろう。こうした点から考えれば、もっと時間をかけて、より丁寧に指導をすれば、もっと、含蓄のある表現が作り出されたかもしれないわけで、指導者として、反省をしなければならない部分は少なからずあろう。ただ、こうした制約がある中でも、指導の成果を感じさせる作品も、もちろん存在する。

凧揚げや風に乗って彼は自由に（推敲前）

上掲の句は、形容詞を用いて心境を表現しようとした作句例である。ただ、直接的に「自由になりたい」気持ちを述べるよりも、「自由」を象徴する「何か」を持って、それを表現した方がいいのでは、とアドバイスをした。その成果として詠まれたのが、次の句である。

凧揚げやあの子は風になりました（2014 雑詠第二席）

風に乗って空を舞う「凧」から、自由を直接的にイメージさせていたものを、「あの子」が「風にな」ったという表現に、その表出を改めたのである。また、「彼」から「あの子」と変えたところに、推敲を重ねていく過程で、当人の心境にも、何かの変化があったのだろうということも垣間見られる。この点、授業や指導では、深く追及はしなかったが、創作の背景としては、興味を引く点でもある。なお、この句は、第5回の「日語俳句大賞」において「台湾学生俳句育成会奨⁹」の雑詠第二席に選ばれ、「凧揚げは一つことに夢中になっている子供の姿が見える典型であろう。何とかしてうまく風を捉えようと厳命（原文ママ）になっている子供を、「風になってしまった」と表現している¹⁰」との選評を頂いたのである。

(5) 語彙や表現の指導など

ここまでに挙げた作品例は、授業での指導をもとに、受講生が推敲を重ねた結果、相応の味ある句に変身できた、成功例ともいえるものである。一方で、体裁が整っておらず、雑記帳風の、いわば、手の施しようのない句も数多く排出されている。しかし、反面、特段の指導を必要とせず、最初から、五七五のリズムに乗り、体裁や内容を備えた句も少なからずある。その場合、特に修正の指示などもせず、そのまま投句させた。次の作品は、こうした、受講者が創作した当初のまま、修正なしに出句し、入選を果たしたいいくつかの

⁹ 「台湾学生俳句育成会」は2012年より有志によって発足した非営利団体であり、「台湾学生俳句育成会規約（案）」によれば、「専ら台湾における学生俳句活動の発展を図ることを目的としている。（2012『ゆうかりぶたす』第3号、pp. 98-99）

¹⁰ 台湾学生俳句育成会（2014）「第5回日語俳句大賞 台湾学生俳句育成会奨」『ゆうかりぶたす』第4号、p. 41。

例である。

天の川夢の船のせ彼方ゆく（2010 雑詠入選）

鳳凰花咲く頃に我は無職かな（2011 題詠第三席）

夜の道一人ぼっちのクリスマス（2012 雑詠入選）

タンポポや愛をばら撒く落下傘（2013 雑詠入選）

寂しさをマスクで隠して早歩き（2014 題詠入選）

山眠る今日も返事を待ちながら（2015 題詠第一席）

いざ勝負バレンタインチョコ今度こそ（2016 題詠入選）

上掲のうち、特に、2015 年の「山眠る今日も返事を待ちながら」の一句は、季語の本意と作者の心境の両面において、非常に調和の取れた内容に仕上がったもので、シンプルな表現ながら味わい深い作品ではないかと思われる。そして、この句を第一席に選んだ廖運藩氏も「好きな人に手紙を書いたが、何時までまっても梨の礫である。無視されたのかもしれないし、手紙が届かなかったとも考えられる。このやりきれない気持ちを目の前の山は、我関せず焉と眠っている。しかしその内に嬉しい返事が来るかも知れない。その時には無愛想な山も屹度笑ってくれるだろう。因みに山笑ふは春の季語である¹¹」と評している。

以上の句が、指導者の指導などの関与を得ず、受講者の創作力のみでその句境を表現し得た作品である。また、このほか、指導者の指導や添削による推敲ではなく、意見やアドバイスを求め、それによって、すぐれた作品を創作するといった場合もある。

例えば、語彙のチョイスに悩んだ学生が、異なる表現を用いた二つの作品を同時に提示し、意見を求めるといったケースである。以下がその作品である。

失恋は隅に捨てられた牡蠣の殻

失恋は身を抉られし牡蠣の殻（2014 題詠第二席）

¹¹ 廖運藩選（2015）「第 6 回日語俳句大賽題詠第一席講評」『ゆうかりふたす』第 4 号、p. 55。

この二つの句に対して、筆者は、上の一句は、その焦点が「隅に捨てられた空虚感」にあるのに対して、下の一句は「身を抉ら」て中身がすっかり空っぽになったという身体性を強く打ち出したような印象を受け、それを「感想」として受講者に述べた。そして、受講生自身が選んで提出したのが、後者の句であった。その結果、「台湾学生俳句育成奨」の題詠第二席に選ばれ、「大胆な発想、かつ大胆な表現の句。失恋を、「身を抉られし牡蠣の殻」とずばり言い切ったところが斬新であり、この比喻は納得できる。若い人ならではの作¹²」との評を得たのである。

また、次に示す句は、やや、物騒な表現を用いているので、その点を指摘し、語彙を考え直すことをアドバイスした。それに基づき、受講生は、少しマイルドで、かつ、より適当な語彙で表現したのである。

また来たな独身殺しのバレンタイン（推敲前）

また来たな独身いじめのバレンタイン（2016 題詠入選）

上掲の句は、「バレンタイン」がパートナーのいない「独身」者を「いじめる」存在であることを、若者の感性で表現した句であると言えよう。また、このケースは、既にできている受講生の当初のイメージを損なうことなく、ただ、指導者として、語彙の修正や再検討を勧めたことで、作品の完成度がより高まったものと考えられる。そして、同様のケースはほかにもあり、以下に示す句においては、第6回（2015年）の「日語俳句大賞」において、3名の選者によって「雑詠」の部の第一席に選ばれたのである。

祖母の手に私の手を置く春の月（推敲前）

祖母の手にわが手重ねる春の月（2015 雑詠第一席）

上掲に二つの句のうち、推敲前の前者の句は、「私の手を置く」だと8文字になる。もちろん、ここでは、1字余っても、大きな問題

¹² 台湾学生俳句育成会（2014）「第5回日語俳句大賞 台湾学生俳句育成会奨」『ゆうかりふたす』第4号、p.41

ではないかもしれない。ただ、「私の手」は「わが手」とした方が、簡潔で、かつ、余韻があるのではないかとの意見を述べた。これを踏まえ、受講生は「わが手」に直し、さらに「置く」の代わりに類義語である「重ねる」を使い、後者の句のように修正したのである。そして、この句は、審査の先生方の目に留まり、第一席の賞とともに、以下のようなありがたい句評を頂いたのである。

お婆さんの皺だらけの手は、長年一家の生活を支えて来た手である。皺の数は即ち苦勞の数であらう。作者は数々の懐かしい思い出に感謝の気持ちを込めて、思はずその皺の手を抱きしめたのである。折しも澄み切った春の月が、その微笑ましい情景を優しく見守っていたのである。選者にも昔々そのような経験があった様な気がするのである¹³。

懐かしい情景。時間がゆっくりと流れている感じがする¹⁴。

久に会った祖孫の睦まじき姿。重なり合った暖かい手に春の月さへ微笑んである。内容と表現が揃った佳句¹⁵。

日本語非母語話者にとって、日本語俳句の創作というのは、いわば、「外国文学」を創作するということである。そのため、必然的に、言語面でのハンディキャップは存在することになる。そうした点を踏まえつつ、指導者としては、受講生の作品の中から、イメージ豊かな句や面白いが表現が未熟な句などを、珠玉を拾い上げるように、できるだけ多くの作品から選び出したつもりである。そして、そうした作品に対して、直接的な指導はもちろん、語彙や表現のアドバイスをしたのである。また、受講生の作品から選出した句

¹³ 廖運藩選（2015）「第6回日本語俳句大賽雑詠講評」『ゆうかりぶたす』第4号、p. 56。

¹⁴ 黄葉選（2015）「第6回日本語俳句大賽雑詠講評」『ゆうかりぶたす』第4号、p. 59。

¹⁵ 李錦上選（2015）「第6回日本語俳句大賽雑詠講評」『ゆうかりぶたす』第4号、p. 61。

は、クラス全員とともに読み進みながら、受講生らに感想を聞くという、「鑑賞」の対象ともした。では、続いて、こうした「鑑賞と句評」の時間について述べる。

4. 授業の展開 (2) 俳句の鑑賞と句評

4.1 3時間目「句評を書いてみる」—作品鑑賞を試みる

本単元の3時間目は、「ほかの受講生が書いた俳句についてコメント」する、つまり「句評」を試みることを目標としている。なお、1時間目と2時間目とは、連続してセットで行っているが、この3時間目は、2～3週間の間隔を空けて行うようにした。

まず、3時間目の「句評を書いてみる」といったプログラムの最初に、教師は、「人気の高い作品は必ずしも「日語俳句大賽」で選出されるわけではない」ということ、あらかじめ学生に示す。また、「鑑賞」というのは個人の内面に閉じられるものではなく、外部に向かって開かれるものであると同時に、作者の意図とは別に、鑑賞者による自由な解釈も許されるものである、との説明も加えた。そして、同じ句が複数の審査員によって選出されるケースもあることを話し、事例として、次の句とその事例を紹介した。

向日葵や日を追いかける首だるし (2010 雑詠)

上掲の句は、第1回のコンテストで4人の審査員に選出された句で、その評として、第二席に選んだ李錦上氏が「「日を追いかける」とはよく詠んだ一句、下句の「首だるし」に向日葵のあの大きな花が項垂れて疲れた形容が面白い¹⁶」と述べたものである。

また、「鑑賞」の授業の手順であるが、おおむね、次の通りである。まず、前作業として、2時間目に学生が創作した「雑詠」と「題詠」の句から、それぞれ10句を教師が選定する。そして、その句をスライド化して一句ずつ受講生らに提示し、これらの句は、何を表そう

¹⁶ 李錦上選 (2010)「第1回日語俳句大賽雑詠講評」『ゆうかりふたす』第1号、p. 30。

としているのかや、また、これらの句からどのような印象を受けているのか、といった質問をし、受講生を指名して答えさせる。こうして、全 20 句についてその回答を確認した後に、受講生らに、最も好きな句を一句だけ選ぶように指示し、その句と選んだ理由をあらかじめ配布した用紙に書かせた。では、以下に、「卒業」をテーマとした作品の中から、次の句を「最も好きな句」に選んだ 4 人の選定理由や感想を、その具体例として示す。

卒業や最終試験の筆置きぬ（2013）

〈選定理由〉

- ・結果がどうであれ、4 年間の努力が、この一瞬で全部終わったという感じがして、とても泣けてきます。
- ・大学生活ももう少しで終わり、社会に出たらもう「試験」というものはなくなる。嬉しく思う反面、切なさも感じる。
- ・もうすぐ卒業すると考えると、感傷的になってしまう。時間がたつのは本当に早くて、試験が終わると、さようならを言わなければならない。ううう…
- ・最終試験の筆を置いて、やっと卒業。「筆を置く」の意味するところがとても素敵です。残り少ない時間を大切にしようと思います。

なお、俳句鑑賞という行為について、石塚修（1996）は、読者の読みが非常に自由であることに触れた上で、次のように述べている。

ただし自分の読みがはたしてどこまでの整合性や他に対する説得力を持つかということも気になるのも事実である。自分勝手な気ままな読みの世界を楽しみたいと思う一方、やはり自分の読みを他人とも共有できるような読みの世界として楽しみたいとも感じている¹⁷。

¹⁷ 石塚修（1996）「多様な「解釈」を楽しむ俳句の授業—俳句指導の類型化の問題点を考える—」『人文学教育研究』23、pp. 13-25。

こうした「相互批評」の考えは、俳句の授業において、イメージネーションを働かせるのに有益であると思われる。そして、3 時間目の授業で、ほかの受講生の句に対して感想や解釈を書くように指導したのも、こうした理由によるところが大きい。なお、当該授業の進行上の注意点として、スライドで作品を示す際には、作者名は伏せるようにすることと、また、受講生らに対して、提示された句が自分の作であることを明かさないように事前に注意しておくことの2点に留意した。こうして、各作品に対する受講生らの評論を得た後、その評論をスライドに収録する。そして、そのスライドは、俳句の受け止め方の多様性ということを学習者とともに再確認する作業を行うべく、4 時間目の授業で用いるのである。

4.2 4 時間目「句評について語り合う」—俳句について考える

坪内稔典（2010）は句会形式の授業を小・中学校で行ってきた経験を振り返り、以下のように述べている。

自分の句が選ばれるかどうかで緊張し、「言葉って面白い」「言葉って楽しい」と（学習者が）思ったとしたら、その思いは言葉への態度を柔軟にし、読んだり書いたり作ったりすることの意欲を高める（ことにつながっている）のではないか¹⁸。（カッコ内は筆者による）

また、俳句の指導を6年間にわたり行ってきた筆者としては、自分の思いを17音の文字で表現することや、そうした自分の句をほかの人が「好きな句」として選んだり感想を述べたりすることといった、創作と鑑賞の過程が楽しくないはずはない、ということの大いに感じている。

そのため、こうした楽しさをより深め、受講生間で共有すべく、本単元の4時間目に、鑑賞の確認というステップを取り入れたので

¹⁸ 坪内稔典（2010）「短詩型の創作指導の意義と方法—「俳句」の立場から—」全国大学国語教育学会『国語科教育』67、pp. 5-6。

ある。

具体的には、①教師は事前に、3 時間目に収集した受講生の句評（好きな句に対する感想）を句ごとに分類したものをスライド化しておく。②それを授業で受講生に提示して内容を確認させる。③その後、「俳句」というものについて思ったことを受講生各自に自由記述で記録させる—といったものである。

なお、「最も好きな句」として選ばれるのは、受講生自身が同感・共感できる句であることが多い。では、ここでは、数多い作品の中から、2013 年度の授業で、受講生 38 人の間で「最も好きな句」として、それぞれ 6 人と 4 人の選を獲得した二つの句を提示し、その傾向について述べる。

卒業やどんな人生待ってるの（2013）

卒業や愛しき友よさようなら（2013）

上掲の二つの句は、いずれも、「卒業」をテーマとしたものである。ただ、その内容は、決して、同様のものではない。前者の句は、卒業を迎え、その後の将来の人生に対する不安を、後者は、4 年もの間、喜びや悲しみを共にしてきた友への気持ちを、それぞれ率直に詠んだ句である。そして、そのテーマや内容は、受講生らの共感は得られやすいものであり、純粋な内容と素直な表現に、多くの受講生が引かれたのであろう。しかし、残念ながら、これらの句はコンテストでは選出されなかった。それは、句意はとても直接的であり、余韻があまり感じられないからというのが理由の一つと考えられる。そのため、同じく卒業をテーマに詠んだ「卒業や最終試験の筆置きぬ」（2013）ほど、審査委員の気持ちをつかむことはできなかったのではないかと思うのである。

また、本単元は、その受講生は大学生であるが故に「勉強の風景」や「卒業」を題材とした作品が多くあり、特徴の一つと言えよう。では、以下に、それらをテーマとした作品をいくつか紹介する。

授業中の居眠りさます蝉の声（2010 題詠第一席）

鳳凰花咲く頃に我は無職かな（2011 題詠第三席）

緑蔭や教科書捨てて寝入るなり（2012 題詠入選）

卒業や泣き笑いの記念写真（2012 雑詠入選）

本を読むわが師の声や目借時（2013 題詠第二席）

卒業や最終試験の筆置きぬ（2013 雑詠入選）

蝸や青春時代の別れ歌（2015 雑詠入選）

5. 本单元における学生の感想

ここまでは、本单元における、俳句の創作と鑑賞についてその授業内容を述べてきた。では、続いて、授業の内容に対する受講生らの反応や感想を、2014 年度の受講生らの答えを例として提示する。これは、4 時間目の授業の終段において、「我覺得俳句／俳句についての感想」という設問を記した用紙を受講生らに配布し、自由記述で回答してもらったものである。なお、回答の提出は任意であり、また、提出の有無や回答の内容は、授業の成績とは無関係であることを説明し、結果として 26 人から回答が得られた。なお、紙幅の制限上、一部の回答のみの提示となることを了承されたい。

- ・少ない字数制限の中で一つの感慨を叙述することはとても面白く、チャレンジしたくなる。(No. 2)¹⁹
- ・奥ゆかしい。(No. 3)
- ・字数制限の中でイメージを表現する過程が楽しい。(No. 4)
- ・短い字数でイメージを伝え、読者に想像を任せる。(No. 5)
- ・まる子ちゃんのおじいさんが急に「心の俳句」を詠みだす場面はばからしくいつも笑えるが、実際に作ってみると本当はとても難しいものだと思った。(No. 8)
- ・最初はとても難しく感じたが、句ができあがると何かをやり遂げたような満足感がある。(No. 9)
- ・面白いけど、語彙が足りないから思うことを表現することがち

¹⁹ 各項末尾の（カッコ）は、受講者を区別するための任意の数字である。

よっと難しい。(No. 11)

- ・思わず同感をしてしまう句がたくさんあって、(ほかの人の句を見るのが²⁰) 楽しい。(No. 12)
- ・面白いけど、頭をかなり使うから疲れる。(No. 13)
- ・さまざまな句がありそれぞれの風景がある。とても面白い。(No. 15)
- ・難しいが面白い。一つの句に対して多様な解釈ができるのが面白い。(No. 16)
- ・同じ季語を使っても、句の内容はみんなそれぞれ違うから面白い。(No. 17)
- ・複雑で難しい。日本人ってすごい。(No. 18)
- ・うまい句を書くのは難しいけど、ほかの人の作品を鑑賞するのは楽しい。(No. 19)
- ・思うことをはっきり、しかもきれいにまとめることがとても難しい！(No. 20)
- ・実は前にも俳句を試作したことがあったが、その時は要領がつかめずうまくできなかった。今回先生の説明を聞き、俳句はあまり感傷主義に陥ってはいけないこと、そして短い詩形の中に、はっきりしたイメージを伝えることが大事だと指導され、俳句に対する理解を深めることができた。非常に勉強になった。(No. 21)
- ・句を書いた人の当時の考え方を知ることができるから面白い。(No. 23)
- ・脳みそを絞って考えても、いい句が作れるとは限らない。努力で何とかなるものではないように感じた。(No. 26)

以上のコメントをまとめると、以下の数点が最も多く見られる意見として挙げることができる。

²⁰ 「(カッコ)」は、筆者による補足。

- ①俳句の創作は面白い。もしくは達成感がある。
- ②よい句を作るのは本当に難しい。
- ③日本語の語彙が足りないため、うまく表現できない。
- ④たとえ同じ季語を使っているとしても、それぞれの表現内容が違うなど、ほかの人の作品を鑑賞するのは楽しい。
- ⑤俳句について理解を深めることができた。

以上が、筆者が携わっている、台湾人大学生を対象とした俳句の創作と鑑賞についての指導の状況である。なお、俳句の創作を学校教育に用いることについて、橋本直（2006）は次のように述べている。

自分の五感で感じとった様々なことを、特定のルールの基に言葉で表現してみる。そして、同じ行為をした人間の作品の選や相互批評をし、他者とその表現に理解を深めること。さらに、それらの行為と他の学習効果を総合し、自己の表現や理解が独善的／個性的／陳腐なものかを認識すること²¹。

そして、台湾の大学といった教育現場において、6年もの間、俳句の創作と鑑賞について指導を行ってきた筆者としては、個人的な経験の面を含め、対象者が母語話者であるか否かという違いはあれど、上掲の主張に大いにうなずくところである。

6. おわりに―指導側の反省点をかねて

本単元の指導に際して実際に直面した問題として、①時間的な制約、②受講生の俳句に対する予備知識の欠如、③日本語の表現や語彙の問題、④授業のプログラム面での制約―などが挙げられる。最後に、指導する側の反省すべき点とともに、こうした問題について述べたいと思う。

まず、時間的な制約といった問題である。後期の授業は、定期試

²¹ 橋本直（2006）「大学で俳句を教えるということ」『短歌ヴァーサス』9号。

験を除いた実際の授業週間は12週間である。そして、この12週の授業期間で、二編以上の異なる作家の短編小説と、「俳句の創作と鑑賞」といった内容で、三つの学習単元を構成している。そのうち、俳句の授業は約2週間分・4時間程度で、それを創作と鑑賞とに、それぞれ半分の時間を当てる。ただ、「俳句創作」では、受講生が実際に創作するための時間は、1時間ほどである。また、受講生が作ったすべての句に対して教師がコメントを出すことや、さらなる推敲を促すことは、実際には困難である。そして、受講生が推敲を重ねる時間も、それほど多くは取れない。特に、創作と推敲の時間に制約が生じるのは、授業のプログラム設計面での問題もあるが、ほかにもう一つの理由がある。それは、創作において、盗用を防ぐというものである。周知の通り、俳句は、類句が多く、盗句しやすい文芸である。そして、作者本人にその意志がなくても、季語などを調べるなどの際にインターネットなどを用いると、多くの例句を目にすることになり、その結果、それらに影響を受けた、もしくは、似通った言葉の表現や内容のイメージを持った句を詠んでしまう可能性は大いにありうる。そのため、「日語俳句大賽」へ投稿するという点も踏まえ、創作の独自性を確保するという点から、宿題としてではなく、授業時間内に行わせ、できるだけその現場で指導を行うようにしているのである。ただ、限られた時間内で、受講生らのすべての句に対してコメントや意見を出すことは難しく、結果として、「3. 授業の展開(1)俳句の創作」で示したように、創作上の問題点を抱えたまま提示される作品も存在するのが実情である。ただ、こうした作品も、学生が率直に自分の感情を表現した結果であることには違いない。そして、句としての体裁は整っていないかもしれないが、内容として、うなずいたり、ほほ笑んだりする作品も存在する。こうした点を踏まえ、表現や体裁として完全ではないが注目すべき発想を有する句や、最初から体裁や内容が相応に整っている句を中心に、「日語俳句大賽」への投稿を目標にして2時限目において

指導を行いつつ、そこで指導が行き届かなかった作品については、必要に応じて、その作者に対して個別の指導を行っている。こうした、珠玉を拾い上げて、原石を磨いていくような過程は、指導者として、とても有意義な体験である。今後は、こうした思いを踏襲しつつ、限られた時間の中で、いかに有効に、かつ、バランスの取れた講義を行うのかを課題として、授業の改善を図りたいと考えるものである。

また、「俳句鑑賞」においては、鑑賞の主な対象が受講者同士の作品であり、身近な人の作品が読めるという点は、非常に好評を博した部分ではある。ただ、著名な俳人の名句を鑑賞する時間を十分に提供できなかったという側面もあり、こうした点は、大いに反省せねばならないと考える。

そして、筆者のこうした経験から得たものとして、台湾の大学で高年次生を対象とし、日本文学の授業の一環として日本語俳句の指導を行うに際して、以下のような三つの点が重要ではないかと思う。

- ①対象者は「成人」であり、子供ではないという点を忘れてはならない。そして、俳句は、言葉によるイメージの連想ではなく、季語の意味と、学生の実体験を回想するように促し、具体的なイメージを言葉に凝縮するように指導する。
- ②対象者が「日本語非母語話者」であり、「第二言語学習者」として「日本語俳句を詠む」という点を常に念頭に置く。
- ③季語に対するイメージを膨らませるのに効果的な方法（画像や身近な体験など）を用意する。

なお、「日語俳句大賽」の選者の一人である楊海瑞氏は、初回のコンテストの選句に際して、台湾人大学生の作品に初めて触れた時の感想を、次のように記している。

諸君の句作を拝読致しました。レベルが高いのに驚きました。ところが、説明調、報告式、季語の重なりなどが多少ありまし

た。(中略)さて、私の句作の心得を紹介します。季語の本質の勉強、具体的に詠む、分かり易く簡単に、物を見て瞬間の変化を捉える、実感を捉えるなど。感動は発見であり、心の驚きであり、瞬間の変化でもあります²²。

上掲の意見は、単なるコメントではなく、本單元のような指導に際して、非常に参考になる見解だと筆者は考える。

また、本論においても幾度となく触れている「日語俳句大賽」は、その開催趣旨を「俳句による日本語教育の促進と台湾に於ける俳句の普及」を目的としたものである。そして、筆者が文学の講義に俳句を取り入れ、その受講生が創作した句の中から、相応のレベルにあると思われる作品を、この「日語俳句大賽」に投句させるようにしてから、2016年までで既に7回を数え、そこで得られた意見や評価は、作者のみならず、筆者としても、貴重かつ有意義なもので、大いに励みとなるものである。台湾での日本語文芸関連のコンテストとして定着を目指す「日語俳句大賽」は、俳句を嗜み、そして、日本語教育に携わる筆者としても、極めて有益なもので、これを主催される花城可裕氏をはじめ、義守大学応用日語学系の諸先生方、審査委員を務めてくださっている台北俳句会の俳人諸氏、台湾学生俳句育成会の選者の方々には、多大な感謝と敬意を払わずにはられない。そして、日本語俳句が、台湾という地において若い世代に広まっていくことを願いつつ、今後も、文学の講義において、学生に俳句を教え、句を詠んでもらい、学生と一緒に句を鑑賞し、微力ながら諸方面に貢献したいと考える次第である。

付記

本稿は、2014年5月10日、中国文化大学で開催された「〈學際性複合領域研究〉之日語教育學」シンポジウムでの発表内容に、大幅な加筆と修正を加えたものである。

²² 楊海瑞 (2010)「総評」『ゆうかりふたす』第1号、p.26。

参考文献

- 石塚修（1996）「多様な「解釈」を楽しむ俳句の授業—俳句指導の類型化の問題点を考える—」『人文学教育研究』23
- 黄葉選（2015）「第6回日語俳句大賽雑詠講評」『ゆうかりふたす』第4号
- 沈美雪（2012）「作品の精読に働く思考力の向上を目指す「日本近代文学」の授業—中国文化大学日文系で教える日本文学の授業実践報告—」東吳大學日本語文學系「創系四十週年紀念 2012年日語教學國際會議」
- 台湾学生俳句育成会（2012）「台湾学生俳句育成会規約（案）」『ゆうかりふたす』第3号
- 台湾学生俳句育成会（2014）「第5回日語俳句大賽 台湾学生俳句育成会奨」『ゆうかりふたす』第4号
- 坪内稔典（2010）「短詩型の創作指導の意義と方法—「俳句」の立場から—」全国大学国語教育学会『国語科教育』67
- 橋本直（2006）「大学で俳句を教えるということ」『短歌ヴァーサス』9
- 楊海瑞（2010）「総評」『ゆうかりふたす』第1号
- 李錦上選（2010）「第1回日語俳句大賽雑詠講評」『ゆうかりふたす』第1号
- 李錦上選（2013）「第4回日語俳句大賽雑詠講評」『ゆうかりふたす』第4号
- 李錦上選（2015）「第6回日語俳句大賽雑詠講評」『ゆうかりふたす』第4号
- 廖運藩選（2015）「第6回日語俳句大賽題詠第一席講評」『ゆうかりふたす』第4号
- 廖運藩選（2015）「第6回日語俳句大賽雑詠講評」『ゆうかりふたす』第4号